

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（A）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17201047  
 研究課題名（和文）アブラハムの伝統の臨界：三大一神教の哲学、神学・政治論とその外部の地域文化研究  
 研究課題名（英文）Critical Points of Abrahamic Tradition : Cultural Studies on Philosophy and Political Theology of the Three Monotheisms and their Margins

研究代表者  
 大貫 隆（ONUKE TAKASHI）  
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
 研究者番号：90138818

## 研究成果の概要：

ユダヤ、キリスト、イスラームの三大一神教を「アブラハムの伝統」と捉え、そこに内在する差異、および他の宗教との差異を、地域文化研究に特有な多元的視点でもって分析、理論化した。その作業によって、「文明の衝突」論に見られるような、文明（西洋）／野蛮（非西洋）という図式の看過や行きすぎを指摘、訂正するとともに、世俗性もしくは世俗化についても、社会のあり方に応じて多様な形態がありうることを示した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2006年度	7,300,000	2,190,000	9,490,000
2007年度	7,300,000	2,190,000	9,490,000
2008年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
総計	22,800,000	6,840,000	29,640,000

## 研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：一神教、多神教、アブラハム、神義論、世俗化、キリスト教、イスラーム、ユダヤ

## 1. 研究開始当初の背景

アブラハムは、聖書において重要な位置づけを与えられているのみでなく、クルアーン（コーラン）においても「すべての信者の父」と称され、ユダヤ、キリスト、イスラームの三大一神教の分岐点に屹立する重要な形象である。これら三宗教に共通の要素について、「アブラハムの伝統に属する」という表現が、近年、欧米でよく見られるようになった。し

かし、いわば三宗教の兄弟性を強調するこの表現とは裏腹に、現代世界における対立もしくは敵対は、同じ唯一神の啓示をめぐる三つの異なった解釈の間で起きていると言っても過言ではない。

2005年度を初年度とする本研究の構想が形成された時期には、サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』（1996）を地で行くような「グローバルな対テロ戦争」の雰囲気

世界を覆っていた。もっぱら宗教を基盤とした「文明」の対立として描かれた「文明の衝突」という見方についてはいくつもの問題点も指摘されている。しかし、その衝突の図式に沿うように国際政治の言説が展開されていたのも事実である。それは、西洋=文明=キリスト教 / 非西洋=非キリスト教=野蛮という対立を前提としていたが、その実、最も鋭い対立はキリスト教（およびそれと連携したユダヤ教）とイスラーム教との間に起こっているかのように呈示されてもいた。この点については、フランシス・フクヤマが自由主義的民主主義の勝利を語る著作、『歴史の終わり』（1992）で示した、唯一、民主化という世界の趨勢に従わぬイスラームという図式が活用されているかのようなのである。現代史はその対立を中心に動いており、「アブラハムの伝統」の外部にある文化圏は、歴史の脇役でしかないような観さえ呈していたさえ言えよう。

本研究は、以上のような図式を踏まえながらも、その図式が描き出す世界像の妥当性を批判的に検証し、より正確で現実に忠実な知見によって、諸文化間の交流やコミュニケーションの円滑化を図ろうとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、すでに包括的なかたちでは、「1. 研究開始当初の背景」の末尾に述べられている。すなわち、1) 宗教間もしくは宗教に依拠する世界観どうしの衝突という図式の批判的検証； 2) その図式に問題点があると判明した場合は、いっそう正確な宗教観、世界観の把握； 3) さらに誤解等に立脚する対立を、少なくとも概念や言説のレベルで、解消する試みであった。

以上の3点は、具体的に以下のような目的性をもったアプローチによって目指された。

アブラハムの伝統の特異性をなす主要構造の抽出と分析。とりわけ、あくまでも神は正しいとする神義論（弁神論、theodicy）の構造を非寛容を動機づける契機として注目しつつおこなう。

西洋的な意味での宗教（religion）の特異性の分析。非啓示宗教、とりわけ東アジアの宗教からの視点を重視しつつおこなう。

西洋的な religion のグローバル化における諸相、植民地におけるキリスト教定着をめぐる諸問題を検証する。

アブラハムの伝統内部における相克の分析。キリスト教 / イスラームというのが今日もっとも顕在的な対立であるが、本研究ではキリスト教内部の非均質性を確認することにも力点を置く。

神聖 / 世俗、宗教 / 非宗教の分離と混淆。今日イスラームに対する主要な批判のひとつは政教分離を認めないというものである。はたしてそれがイスラームのみの特徴なのかを確認する。

今日の文化のおよびサブカルチャーの想像力を構造化するものとしての 宗教的なものを確認する。

## 3. 研究の方法

本研究は、複数のディシプリンを連携させた地域文化研究として構想された。「一神教 対 多神教」という問いが宗教学を始めとする単一のディシプリンの内部で立てられることは珍しくない。しかし本研究は、相異なった地域、および宗教学、哲学、文学、歴史などの相異なったディシプリンを専攻する研究者を有機的に組み合わせ、複眼的な体制によって研究を遂行することを目指した。この体制の適切な運用によって、「アブラハムの伝統」の「内部」にも「外部」にも限定されぬ視点を通じた、多面的な「臨界」の記述という成果を得ることを企図した。その具体的な研究方法は以下のようなものである。

本研究の研究研究者（最終年度のみ連携研究者となった）は、すべて同一専攻の構成員であったため、全員が集合する必要がない場合は、アドホックに情報交換をおこない、密な連携を維持しつつ研究をおこなうことを心がけた。

研究の節目に、より深化した全員参加かつ公開の共同討議をおこない、研究の進捗状況を確認するとともに、新たに獲得された知見の共有を心がけた。共同討議の日程、主たる発表者、テーマは「4. 研究成果」に記したとおりであるが、一堂に会した機会に、メイン・テーマに限らず多岐にわたる情報交換をおこなった。

研究期間の始めと終わりに公開シンポジウムを開催した。最初のシンポジウムは、「キリスト教の脱構築」を提唱したことで知られるジャン＝リュック・ナンシー氏（Jean-Luc Nancy、フランス・ストラスブール大学名誉教授）を招いておこなったものであるが、氏の一連の業績

をふり返ることによって本研究の基調を確認するためであった。研究期間終盤に開催した2つのシンポジウムは、双方とも「世俗化」を扱っている。最後のシンポジウムには、フランスから宗教社会学の第一人者として知られるジャン・ボベロ(Jean Baubérot、パリ高等研究院教授)も参加した。双方とも、本研究の進展とともにクローズアップされてきた「世俗化」という概念をいっそう詳しく検証し、成果のまとめへと向かうために開催したシンポジウムであった。(以下、「4. 研究成果」参照)

定期的に情報交換をおこなっていた海外の研究者の一部を招いて招待講演会・研究会をおこなった。それぞれドイツの宗教学者と宗教教育の権利であるペーター・ミュラー(Peter Müller、カールスルーエ教育大学教授) / アニータ・ミュラー=フリーゼ(Anita Müller-Friese、フランクフルト大学私講師・バーデン州プロテスタント教会中央研究所主任)両氏が、世俗化とドイツにおける宗教科教育をめぐる状況について報告をし、本研究メンバーと意見交換をおこなった。(以下、「4. 研究成果」参照)

#### 4. 研究成果

以上の共同討議、シンポジウム、招待講演は、研究を進めるための手段でもあったが、同時に成果発表の場でもあった。それぞれの発表がおこなわれた日付、主な発表者、テーマは以下の通りである。

##### 共同討議

- ・第1回 : 2005年10月9日、大貫隆「アブラハム伝承」
- ・第2回 : 2005年12月22日、増田一夫「『最後のユダヤ人』における『赦し』デリダとキリスト教」
- ・第3回 : 2006年9月27日、『一神教とは何か 公共哲学からの問い』(大貫隆他編、東京大学出版会、2006年3月刊)に収録された大貫隆と黒住眞論考をめぐる討議
- ・第4回 : 2007年5月25日、安岡治子、「シンフォニック・リーチノスチ ユーラシア主義に見られる全一的理想社会の探究」
- ・第5回 : 2007年9月28日、杉田英明、「佛教説話の東西伝播『二鼠譬喩譚』を

中心に」

- ・第6回 : 2008年2月22日、安西信一、「黙示録的想像力と原爆」, シャピロ『原爆映画』をめぐって」
- ・第7回 : 2008年6月27日、網野徹哉、「リマに墜ちた天使 16世紀ペルーのある異端者の歴史」
- ・第8回 : 2008年9月1日、北川東子、「ドイツ現代思想における『宗教』というテーマの位置づけ」

シンポジウム(最初と最後のものは、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」との共催、第2のものは東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻との共催)

- ・2005年4月15日、Autour de l'« A-athéisme » de Jean-Luc Nancy (「ジャン=リュック・ナンシーの『無 無神論』をめぐって」)。ジャン=リュック・ナンシー氏(ストラスブール大学名誉教授)を囲んでのシンポジウム。キリスト教に特有の「神の死」の概念、そこから発しての「みずから脱構築する宗教」としてのキリスト教を考察した。仏教などの相違も言及されている。主にキリスト教をめぐる諸問題を多角的に扱い、本研究の基調を告げるシンポジウムであった。シンポジウムの記録は、『水声通信』10、水声社、2006年に収録されている。
  - ・2008年11月1日 : 「世俗化する宗教」。研究期間の終わり近くで開催され、とりわけ研究の終盤になってクローズアップされた「世俗化」の概念を中心に扱っている。
  - ・2008年11月28日 : 「21世紀国際ライシテ宣言とアジア諸地域の世俗化」。ジャン・ボベロ・パリ高等研究院教授を囲んでのシンポジウム。とりわけ非西洋世界の世俗化をどのように考えるかというテーマを多角的に検討した。
- 招待講演(上記 COE と共催)。
- ・2008年5月12日 : ペーター・ミュラー / アニータ・ミュラー=フリーゼ「宗教と世俗化」
  - ・2008年5月13日 : Peter Müller and Anita Müller-Friese, “ Intercultural and Interreligious Learning in a German Perspective. Situation, Concepts, and Challenges. ”

・2008年5月16日 : アニータ・ミュラー=フリーゼ、「ドイツにおける宗教科授業の現状」

以上のようなプロセスを経て、次のような成果が得られた。(それぞれの項目の末尾に、最も貢献した研究者の名を付し、「2」などの記号)によって上記「2. 研究目的」の各項目との対応関係を示した。)

グノーシスにおける「妬み」の神、アメリカ民主主義の神学的背景、ロシア正教におけるユーラシア主義などの考察によって、神義論と一神教の排他的構造を確認した。(大貫、増田、安岡; 2 )

東アジア圏における神道、仏教、儒教諸思想の主要構造を取り上げ、とりわけ日本における「まつりごと」の概念と中華世界の構造および中国における「宗教」概念を分析することによって、religion 概念の新たな境界画定を試みた。イスラーム社会における宗教の位置づけ、ユーラシアにまたがるロシア正教の考察もこの境界画定の作業に貢献した。(黒住、杉田、村田、安岡; 2 )

キリスト教がグローバル化する過程を具体的に検証する作業として、スペインが進出した新大陸におけるキリスト教と基層文化の葛藤を分析した。また、日本、中国など東アジアにおける基層文化とキリスト教との遭遇の諸相も考察した。(網野、黒住、村田; 2 )

グノーシスを中心としたキリスト教内部の異端、新大陸進出時に起きた異端騒動、東方キリスト教会の異質性、ユダヤ教、イスラーム教における多様性を具体的な事例に則して分析した。(大貫、杉田、増田、網野、安岡; 2 )

グノーシスの政治学的次元、イスラーム文学における聖俗のあり方、フランス共和制における政教分離とイスラームに対する態度を分析し、いかなる文化においても完成された政教分離が存在しないことを示唆した。(大貫、杉田、増田; 2 )

今日のインターネット、アニメにおける宗教的形象を分析し、宗教的要素がいかに根深く現代人の想像力を構造化しているかを示した。また核戦争を扱う文学、映画等における黙示録的なイメージを追究した。(大貫、安西; 2 )

なお、昨年度より成果報告は電子的におこなえばよく、印刷物としての研究成果報告書は不要となった。しかし、本研究では、成果報告冊子「アブラハムの伝統の臨界: 三大一神教の哲学、神学・政治論とその外部の地域文化研究」(A4版、250頁)をまとめ、関係各方面に配布した(以下、「5. 主な発表論文等」〔その他〕参照)。ウェブサイトでの公開は現時点ではおこなっていないが、検討中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計26件)

1. 杉田英明、「お喋り床屋の系譜——中東・ヨーロッパ文学における古典の形象と変容」、*Odysseus* (東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要)、第13号、1-32頁、2009年、査読・無。

2. 増田一夫、「いかにアメリカを語らないか? 最悪の友からの言葉」、『*アメリカ太平洋研究*』(東京大学大学院総合文化研究科・アメリカ太平洋地域研究センター)、第8巻、36-44頁、2009年、査読・無。

3. 村田雄二郎、「敵の敵は友?——中米関係100年」、『*アメリカ太平洋研究*』、第8巻、18-27頁、2009年、査読・無。

4. 大貫隆、「トマス福音書語録 77 とグノーシス主義のアニミズム」、『*聖書学論集*』、40号、61-90頁、2008年、査読・無。

5. 村田雄二郎、「五四時期国語統一論争 從“白話”到“国語”」(中国語)、『*東亜人文*』、第1巻、135-164頁、2008年、査読・無。

6. 村田雄二郎、「清末の言論自由と新聞 天津『*国聞報*』の場合」、『*近きに在りて*』、第54巻、2-16頁、2008年、査読・有。

7. 杉田英明、「中東世界における『二鼠譬諭譚』——佛教説話の西方伝播」、『*比較文学研究*』、第89号、68-101頁、2007年、査読・有。

8. 北川東子、「哲学における『女性たちの場所』 フェミニズムとジェンダー論」、『*哲学*』(日本哲学会誌)、45-60頁、2007年、査読・有。

9. 北川東子、Family as a Philosophical Issue from a Japanese Perspective, *The Review of Korean Studies*, VI, 2007, 査読・有。

10. 増田一夫、「エルゴ・ユダエウス・スム『最後のユダヤ人』としてのデリダ」、別冊『環』、第13号、262-278頁、2007年、査読：無。

11. 杉田英明、「欧米文学のなかの『アラビアン・ナイト』 明治～昭和前期日本への紹介」、外国語紀要(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部外国語委員会)、11号、1-68頁、2007年、査読：無。

12. 増田一夫、「統合の臨界 『人種』なき共和国フランスの試練」、Odysseus(東京大学大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻紀要)、11号、65-84頁、2006年、査読：無。

13. 安西信一、「志賀重昂『日本風景論』における科学と芸術 無媒介性と国粹主義」、芸術文化、11号、3-15頁、2006年、査読：無。

14. 安岡治子、「ゾシマ長老と東方キリスト教」、エイコーン 東方キリスト教研究、33号、29-50頁、2006年、査読：無。

15. 安岡治子、「シンフォニック・リーチノスチ ユーラシア主義に見られる全一的理想社会の探求」、ロシア・東欧研究(ロシア・東欧学会年報)、34号、26-36頁、2006年、査読：無。

16. 大貫隆、「まだ見ぬ隣人」、清泉女子大学キリスト教文化研究年報、13巻、87-103頁、2005年、査読：無。

17. 大貫隆、「太田修司氏の論評に答える」、ペディアヴィウム、57号、31-68頁、2005年、査読：無。

他9件

[学会発表](計5件)

1. 黒住眞、「近世・近代・21世紀から見た新井奥邃・倫理思想」、京都フォーラム第85回「新井奥邃と公共人間」、2008年10月11日、京都。

2. 黒住眞、「倫理的道程における死と再生 いま生きているとは」、京都フォーラム第84回「公共哲学」、2008年10月3日

3. 大貫隆、Liberal Education and Bible Studies in University in Japan、国立交通大学通識教育委員会、2008年10月3日、台北。

4. 北川東子、Feminist Identity and Family Identity、国際女性哲学者連合、2008年7月、ソウル。

5. 大貫隆、「Globalismus」und Christentum / Zu Kolosserbrief、Deutsche Ostasienmission 第3回国際シンポジウム、2008年4月3日、ソウル。

[図書](計20件)

1. 増田一夫、東京大学大学院総合文化研究科ドイツ・ヨーロッパ研究センター、「人種と人種主義を問う」、87-99頁(135頁)、2009年。

2. 増田一夫、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」、Sécularisation et Laïcité、59-69頁(109頁)、2009年。

3. 大貫隆、岩波書店、「グノーシス「妬み」の政治学」、2008年、288頁。

4. 大貫隆、De Gruyter Verlag (Berlin), Das Legion 77 des koptischen Thomas-evangeliums und der gnostische Animismus、2008、p.294-317 (545p)。

5. 大貫隆、慶應義塾大学出版会、「ヨーロッパにおける政治思想史と精神史の交叉 過去を省み、未来へ進む」、2008年、25-50頁(402頁)。

6. 北川東子、岩波書店、「講座哲学 歴史ノ物語の哲学」、73-94頁(273頁)、2008年。

7. 北川東子、東京大学出版会、「公共哲学の歩み」、276-294頁(339頁)、2008年。

8. 杉田英明、名古屋大学出版会、「イスラーム世界研究マニュアル」、199-207頁(xxi頁+556頁)、2008年。

9. 網野徹哉、講談社、「インカとスペイン 帝国の交錯」、388頁、2008年。

10. 安岡治子、光文社、「古典新訳の発見 2」、42-63頁(185頁)、2008年。

11. 北川東子、Koenigshausen & Neu-mann, Kulturfaktor Schmerz、p.101-123 (250p)、2008。

12. 大貫隆、St Paul, „I sowed Fruits into Hearta“ (Odes Sal. 17:13). Festschrift for Professor Michael Lattke, ed. P. Allen, M. Franzmann and R.Strelan, Strathfield/Australia, p.157-176 (250p)、2007。

13. 大貫隆、Gütersloher Verlag, Erkennen und Erleben. Beiträge zur psychologischen Erforschung des frühen Christentums, p.321-342 (415p)、2007。

14. 杉田英明、Markus Wiener Publishers (Princeton), The Islamic Middle East and Japan, p.11-31 (350p)、2007。

15. 安岡治子、集英社、「21世紀ドストエフスキーがやってくる」、255-264頁(357頁)、2007

年。

16. 大貫隆、Neukirchener-Verlag, Jesus. Geschichte und Gegenwart, 288p, 2006.

17. 増田一夫、人文書院、『心と身体の世界化』、151-169頁(221頁)、2006年。

18. 黒住眞、ペリカン社、『複数性の日本思想』、568頁、2005年。

他 2件

(その他)(計 15 件)

1. 北川東子、『『神は死してある』:現代哲学にとつてのテーマ『宗教』』、大貫隆、北川東子、黒住眞、増田一夫、村田雄二郎、網野徹哉、安西信一、安岡治子(他 6 名)『アブラハムの伝統の臨界:三大一神教の哲学、神学・政治論とその外部の地域文化研究』(本課題成果報告冊子、以下『アブラハムの伝統の臨界』と略記)、14-22頁(全 241 頁)、2009 年、査読:無。

2. 黒住眞、『近世・近代の日本宗教における世俗化』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、23-35 頁、査読:無。

3. 杉田英明、『『アラビアン・ナイト』原典講読事始:昭和初期におけるアラビア語研究の先達たち』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、36-50 頁、査読:無。

4. 増田一夫、『フランスの『新しい反ユダヤ主義』と『ショアー』の遺産』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、51-74 頁、査読:無。

5. 村田雄二郎、『清朝中国における『宗教』概念受容:『説教』をめぐる』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、91-103 頁、査読:無。

6. 網野徹哉、『マリア・ピサロの憂鬱:或る憑依例からみた 16 世紀後半のペルー植民地社会における宗教状況』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、104-124 頁、査読:無。

7. 安西信一、『黙示録と原爆:ジェローム・シャピロ『原爆映画』をめぐる』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、125-141 頁、査読:無。

8. 安岡治子、『『教会』をめざす国家:ユーラシア主義のユートピア』、大貫隆(他 11 名)『アブラハムの伝統の臨界』、2009 年、142-156 頁、査読:無。

他 7 件

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

大貫隆 (ONUKI TAKASHI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:90138818

### (2)研究分担者

北川東子 (KITAGAWA SAKIKO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:40177829

黒住眞 (KUROZUMI MAKOTO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:00153411

杉田英明 (SUGITA HIDEAKI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:90179143

増田一夫 (MASUDA KAZUO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:70209435

村田雄二郎 (MURATA YUJIRO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:70190923

網野徹哉 (AMINO TETSUYA)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号:60212578

安西信一 (ANZAI SHINICHI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号:50232088

安岡治子 (YASUOKA HARUKO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号:90210244

\*ただし、連携研究者としても同じレベルの研究が遂行できると考えたため、最終年度のみ全員連携研究者へと移行した。

### (3)連携研究者

上記「(2)研究分担者」参照。